Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
13 － 17　（2016）

The ALL Roomsによる高大接続プロジェクト

教育推進総合センター
濱　田　　陽

The Bridge over high school and university through The ALL ROOMs

Yo HAMADA

概要　設立してすでに５年を経過したThe ALL ROOMsであるが、2015年は、外部発信の新しい取り組みとして「高大接続プロジェクト」に取り組んだ。３回県内の高校に出向き、講演・ワークショップをおこなった。本稿では、その内容について報告し、高大接続の意義と今後のThe ALL ROOMsの展望に関して論ずる。

１．はじめに

2013年３月に，「The ALL ROOMsの現在と未来」（濱田, 2013）の中で秋田大学の語学学習環境，通称The ALL ROOMsについて詳細を解説してから３年が過ぎようとしている。オープンから５年が経過し，ある一定の効果が見られ，学生の利用・運営も軌道にのってきていることから, 2015年は，さらなる事業改革を目標とし，「The ALL ROOMsによる高大接続」を試みた。 具体的には，The ALL ROOMsの中心運営者である筆者が中心となり，ある県内高校に定期的に出向き，英語学習に関する講演・ワークショップをおこなうことを通して，高大接続を直接おこなうという試みである。2015年におこなった３度の企画について，以下，論ずることとする。そして，そのうえで，高大接続の概念について考え，今後のThe ALL ROOMsの展望についても考える。

２．第一回目

第一回目の企画は, 2015年２月におこなわれた。高校側からの依頼を受け，PTAの一貫として，講演が設けられ，「国際社会における英語の必要性と学習方法」についての講演を，１学年全員の生徒と希望する若干の保護者を対象におこなった。

講演のポイントは「英語の必要性」と「英語学習法」である。このテーマを選んだ理由は，以前高校教諭だった筆者が，現在大学で教鞭をとっている経験と知見から，高校生が大学・社会を意識しながら英語を学習出来るように，その必要性を伝えようとする意図と，同様に，単なる受験勉強ではなく，その先を見据えた英語学習法を伝えようとする意図からである。

次に，講演の特徴は，Second Language Acquisition Myths（Brown & Larson-Hall, 2012）を参考に，一般的によく言われている英語学習に関する「神話」をＱ＆Ａ方式で解説していったことである。たとえば，「覚えてもすぐ忘れるから私はダメだと思っていませんか？」という問いを投げかけ，生徒に考えさせた。その後で，学術的解答として，知識は反復をしなければ忘れることは自然な現象だということを，エビングハウスの忘却曲線を例に出し，データをもとに説明した。「何度やっても覚えられない」と，嘆く高校生が多いため，学習プロセスにおける動機の不必要な低下を防ぐことを狙った。他の例としては，「単語は10回見ないと覚えられない」というような問いを投げかけ，Nation（2001）のデータを引き合いに出し，単語は１回２回程度で覚えられるものではなく，反復が必要なことを説いた。紹介した「神話」は以下の通りである。

・センター試験に必須は2000語
・単語は10回以上見ないと覚えられない
・単語帳で英語→日本語で覚えている。
・しっかり本文の訳をしている。
・単語を前後から推測する力を磨いている。
・とにかく速く読むよう心がけている。
・スピーキングテスト前に詰め込んでいる
・頭の中でしっかり訳そうとしている。
・問題演習をしてしっかり解説を読んでいる。

講演後，担当の教諭から講演のフィードバックを頂いた際，「英語を使用しているのは英語母語話者だけでなく，世界中の人が使用しており，その権利がある」という話が生徒・保護者にとって新鮮かつ有益な概念だったと伺い，同時に，企画の継続を打診された。

３．第二回目

第二回目の企画は，2015年６月におこなわれた。同じく，PTAの一貫として，講演が設けられ，A bridge between High school and Universityのタイトルで講演をおこなった。対象は，第一回目と同じ生徒であるため，２学年の生徒全員と複数の保護者である。第二回は，筆者だけではなく，The ALL ROOMsの学生スタッフ３名と共同で企画し，実施した。また，担当の教諭によると，前回の企画が保護者間で口コミで広がり，保護者の参加者数が増加したということである。筆者の経験上，対象校の地域性から，保護者の結びつきが強く，生徒や保護者の「口コミ」が担う役割は大きい。第二回目のポイントは，筆者が，理論的な，語学学習の枠組みや仕組みについて説明した後，学生スタッフが，それをもとに具体的な学習方法を解説し，実際に全員で取り組んでみるという理論と実践が融合していたことである。

この企画の特徴は，学生が，高校生・保護者に対して，講演をワークショップ形式でおこなうという，直接的な「高大接続」の企画という点にある。学生は，The ALL ROOMsの学生スタッフから大学院生・４年生・３年生の各１名ずつの，スタッフの中でも最も英語力の高い３名を選出した。３名中２名は教職課程を履修し，教育実習経験者であり，他１名は１年間の海外留学経験者である。

理論的説明では，２年生の６月に必要と考えられるポイントを３点あげた。一つは，学習の振り返りについてである。Krashen（1985）のThe monitor hypothesisに説明されるように，言語学習では，自己の学習やパフォーマンスをモニターすることが重要である。高校生の状況に即して解釈すると，定期テストが返却された際，仮に60点だったとすると，60％習得したと考えるのではなく，未習得の，残りの40点分を重要視する視点である。どのような過程で学習したのか，何が間違っていたのかを自ら考えることが重要だと強調した。これを継続することで，常に自分の学習をモニターする癖がつくことを狙った。次に，MLBのダルビッシュ投手の例を出し，英語学習にも，バランス・トレーニング・精神力が必要であることを説き，スポーツと同じように，そもそも容易に英語を習得できるわけではないということを確認した。また，リスニング・リーディング・スピーキング・ライティングの４技能は独立しているものではなく，それぞれ結びついているものであるため，それぞれ単独で学習するのではなく，有機的に結びつけて学習する方針の重要性を説いた。加えて，英語学習で扱う内容は，他教科で学習したものも大いに関連する場合があるため，他教科の学習とも結びつける発想を持つと，より効果的に学習ができるという説明をおこなった。例えば，地理に詳しい生徒が地理関連の英語の題材を読んだ場合，歴史に詳しい生徒が歴史関連の英語の題材を読んだ場合は，有利である。

学生スタッフが高校生に直接説明と実演をおこなったのは，シャドーイング，ディクテーション，4-3-2である。シャドーイングとは，聞こえてきた音声を即座にできるだけ忠実に復唱する活動で，リスニングの音韻知覚の処理を鍛えることによって，リスニングにおけるボトムアップ処理が向上する。ディクテーションは，聞こえてきた音声を紙に書き取る活動で，シャドーイングに，文字と意味の書類が加わるため，学習者は音・文字・意味の３方向に注意を向けることになる。4/3/2（Nation, 2009）は，スピーキングの活動で，もともとは，４分で最初の発話活動をおこない，２回目は３分，３回目は２分，と時間を短縮していく，発話の流暢性をあげるトレーニングである。高校生が４分話すのはハイレベルすぎるため，今回は，40秒，35秒，30秒とした。

具体的には，まず最初のスタッフがシャドーイ

ングを扱った。Hamada（2016）の手順をもとに，

1）スクリプトを見ないでシャドーイング
2）スクリプトを見て，シャドーイング
3）スクリプトだけ見て確認
4）スクリプトを見ないでシャドーイング
5）スクリプトだけ見て確認
6）スクリプトを見ないでシャドーイング

という基礎的練習方法を紹介したあと，本学で作成した高大接続テキスト（リスニング編）の一部を用いて一緒に練習をした。シャドーイングは，授業でも多く取り入れられていることもあり，高校生にとっても身近なタスクのようであった。

二人目の学生スタッフが，ディクテーションを扱った。手順は，

1．聞く
2．聞いて書き取る（３回）
3．スクリプトを見て，赤ペンでチェック
4．CD と一緒に読んでみる

を用いた。ディクテーションも比較的身近な活動であり，抵抗はないように見えた。シャドーイングとディクテーションは一見類似しているため，それぞれ効果が異なる事も説明した。

３人目の学生スタッフが，4-3-2 を扱った。タスクレベルが高い分，高校生にわかりやすいようにと，題材は，Peach Boy（桃太郎），The Crane of Gratitude（鶴の恩返し）を選択した。手順は，

1．キーワードを各自で選ぶ（全体の10％程度の量）
2．ICレコーダーにキーワードを見ながら要約を吹き込む（100語につき40秒程度）
3．スクリプトチェックと録音したものをチェック
4．レコーダーに再度吹き込む（35秒）
5．確認
6．レコーダーに３回目を吹き込む （30秒）

を基本として紹介したが，ワークショップの際は，レコーダーに吹き込む手順は省略した。また，教科書を使った日々の授業の復習にも活用できることを説明したため，有効活用していただきたい。

最後に，Q & A の時間を設けた。突破口として，英語の教員ではない学年主任自らが英語で筆者らに質問をすると，他の，必ずしも英語が得意でない生徒も，200 名を前に挙手をして一生懸命英語で質問をする光景が見られ，盛り上がった。

本プロジェクトは，６月 23 日付の秋田さきがけ新聞にとりあげていただいた。また，学年主任から，終了直後に，継続して第三回目の依頼と，次年度への継続も依頼された。

４．第三回目

第一回・第二回目と，学習方法についての話が主だったため，第三回は，視点を変えて，国際社会における英語の位置づけをテーマに，10 月 27 日におこなわれた。

The ALL ROOMs では，英語学習のサポートと活動の外部発信とともに，学生スタッフの英語力および人間力育成にも力を入れている。そのため，３回目は，２年生を二名（理工・教育）選出し，また，秋田県出身かつ英語が抜群にできる３年生を，より身近な学生例としてアピールするために一名選出した。経験の少ない２年生に，大舞台での経験を積ませることと，もっとも高校生と年齢の近い学生を起用することで，さらに身近な高大接続となることを狙った。

講演のポイントは，英語は，決して母語話者の「持ち物」ではなく，いまや英語は皆の持ち物である，ということをできるだけ体験的に理解させることを狙った点である。一般的には，英語母語話者はネイティブスピーカーという「ブランド」のもと英会話産業にも重宝され，実際，中学・高校の英語の教科書のモデル音声もほぼネイティブスピーカーが吹きこんだものである。特に，アメリカ英語が大半をしめ，高校の英語の教科書のその９割近くがアメリカ英語で収録されている。（Kawashima, 2009）つまり，高校生にとって，英語は，やはりネイティブスピーカーがモデルであり，将来的に英語を使用するとしても，イメージするのはネイティブスピーカーであろう。そこで，第３回目は，その既存概念が必ずしもそうではないという事を体験的に理解させる意図で企画した。

講演の特徴は，ビジュアル・オーディオを効果的に用いて，さらに学生の実体験と筆者の学術的知見を盛り込むことで，複数の面からアプローチした点である。

実際の進行は以下のとおりである。

1．英語話者とはだれ？についての学術的講義
2．さまざまな英語の音声だけを聞いてみる

Akita University

3．聞いた音声と写真の人物をそれぞれ予想してみる。
4．解答・解説
5．卒業後の英語の使い方

より具体的には，１では，Kachru（1985）に代表される，Inner circle, Outer circle, Expanding circle の概念を紹介した。Inner circle とは，英語を第一言語として話す国々，Outer circle とは，第一言語ではないが，公用語として使用する，シンガポールやインドなどの国々，また，Outer circle は，その他日本を含めた，英語を外国語として話す国々を指す。２，３では，まず出身の異なる５名の女性が，同じ題材を読んだものを吹き込んだ音声を流した。そのあと，ダミー２名を含めた，計７名の写真を提示し，その音源がどの写真に合致するかを予想させた。その後，再度聞いて，ダミーの２名を消した５名と音源の合致を予想させた。実は，ダミーは英語母語話者で，その他５名は全員が母語話者ではなかったのである。４では，敢えて英語母語話者の音声を入れなかった理由などを中心に解説をおこなった。つまり，英語＝英語母語話者という一般概念が存在するが，今や英語は様々な国の人々に話されており，もはや母語話者だけのものではないということである。その際，日々，英語母語話者でない留学生たちと接する，ALL ROOMs の学生スタッフの生の声を取り入れながら，進行した。５では，講演内容の，大学受験の際の活用の仕方や，卒業後どのように活用できるかについて簡単に触れた。

５．高大接続とは

2015 年に３度同一の高校生に対して講演をおこない，そのうち２度は本学の The ALL ROOMs スタッフの学生を交えたワークショップ形式であった。このプロジェクトと，筆者の元高校教諭，現大学教員という視点から，筆者なりの「高大接続」の概念を考察してみたいと思う。

秋田大学では，平成 22 年度から「高大接続教育の実践的プロジェクト」として文部科学省・大学教育推進プログラムに採択された CTC のプロジェクトを，事業終了後も継続して事業拡大しており，文系理系複数の教科で実践的な高大接続教育をおこなっている。筆者も英語のチームのチーフであり，本プロジェクトもその一部として捉えている。

これらの活動を通して，高大接続とは，高校での学習内容の補足を大学でおこなうという定義づけもされうるが，それよりも，本質的には，大学側と高校側が一体となり，大学側のリードにより，高校生の学習が一歩進んだものとなるためのものではないだろうか。つまり，本プロジェクトの例をあげると，シャドーイングやディクテーションなどの学習方法を紹介した。これらは，高校の授業でも用いられるトレーニング法であり，多くの高校生にとってもなじみ深い。しかし，どのような理論で，どのような効果があってこれらの学習方法を用いるのかを明確に答えられる高校生，そして教員は少ないであろう。そこを理論的にわかりやすく，実証的に示し，大学受験の先にある，大学での学習を見据えてこれらの学習方法を用いることを促進するのが，身近なところでいう高大接続であろう。

この構図では，大学の教員と高校生のみしか登場しないが，ここで，大学生が加わることによって，より身近に「接続」が可能となる。つまり，The ALL ROOMs の学生スタッフは，英語の自律的学習者の模範例であり，シャドーイングやディクテーションなども実際に駆使して英語力を向上させたスタッフが多い。教員の意図する効果を，実際に示している，高校生の軌道の延長戦上にいる学習者である。その学習者がより実践的に高校生に講演・実演することによって，さらに深い接続が可能となる。

高校の教員は，大学受験も見据えつつ，高校生の将来的な伸びを期待して，教鞭をとる。そして，大学の教員は，得意分野を生かして，専門的な知見から高大接続を試みる。しかし，そこに「感覚として」潜むギャップが存在する。そこを埋めてくれるのが，ロールモデルとして，より身近な自律的学習者である大学生なのである。

６．今後の計画

2015 年に実施した３度のプロジェクトは，いずれもある程度の感触があり，対象校の先生によると，保護者の評判もよく，実際３回目には 40 名ほどの保護者に増えていた。2016 年の計画は，可能であれば，受験生となる，同じ学年の生徒に対して，実施したいと考えている。その際には，目

Akita University

の前に迫った受験，そしてその先にある大学生活への不安や質問などに対して，ALL ROOMs の学生と教員が直接答え，サポートできるようなプロジェクトを企画したいと考えている。これが実現すると，同一学年に対し，１年次から３年次までプロジェクトを実施するということが可能になり，今までよりも一歩進んだ「高大接続」の事業となるのではないだろうか。

また，現在は一校でしか実施していないが，別の地域でも実施することも検討している。学生スタッフも，基本的には自分の出身高校の事情にしか精通していないため，異なる高校に出向き，直接対応する中で，新たな発見をすることも狙いとしている。その過程を踏むことで，学生スタッフ自身も，よりよい学習者となり，同時に学習者のロールモデルとなるであろう。そして，これらの活動は，アカデミックな分野でも情報発信することが重要だと考えられる。学会発表や論文を通して，他大学に似たような概念が広がっていくことで，少しずつより実質的かつ有意義な高大接続ができていくと思われる。

７．おわりに

筆者が高校教諭を辞職し，大学教員になった理由の一つとして，「高大接続」に取り組みたいということがあった。2015 年の活動は，まだまだ改善の余地もあり，わずかな軌跡にしかすぎないが，これをよいきっかけとしたい。

また，ALL ROOMs を運営する教員として，学生スタッフの育成も重要な任務であり，楽しみである。様々な経験をする機会を提供し，その中で，一人一人が何かを感じ，人間性を育むこと・英語学習のヒントを見つけることが，一般ユーザーの学生の，ロールモデルとなることへもつながっていくと思う。

最後に，このような機会を提供してくださっている対象校の先生方，そして，The ALL ROOMs の活動を全面的に支援してくださっている本学学長と教育推進総合センター長には，この場をお借りし，感謝の意を示したい。

引用・参考文献

Brown, S., & Larson-Hall, J.（2010）. *Second Language Acquisition*. The University of Micigan Press.

濱田陽（2013）The ALL Rooms の現在と未来『秋田大学教養基礎教育研究年報』15, 11 － 19

濱田陽（2014）音をしっかり「捕球しよう」英語教育，63（4），12 － 13，大修館

Hamada, Y.（2016）. Shadowing: Who benefits and how? Uncovering a booming EFL teaching technique for listening comprehension. *Language Teaching Research, 20*（1）, 35-52.

Kachru, B（1985）. Standards, condification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk & H.G. Widdowson（Eds.）, *In English in the World: Teaching and learning the language and literatures*（pp.11-30）. Cambridge: Cambridge university press.

Kawashima, T.（2009）. Current English speaker models in senior high school classrooms. *Asian English Studies, 11*, 25-48

Krashen, S.（1985）. *The input hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.

Nation, P.（2001）. *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Nation, P.（2009）. *Teaching ESL/EFL Listening and Speaking*. UK: Routledge